

日本にルーツを持つカナダ育ちの若者にみる学びの多様性：
日本語コミュニティに再びつながりを求める動機

The Diverse ways of Learning Japanese Among Young Adults of Japanese Background Raised in Canada: What Motivated Them to Reconnect to the Japanese Speaking Community?

三井晶子, ヨーク大学・青木恵子, クイーンズ大学
Akiko Mitsui, York University・Keiko Aoki, Queen's University

1. はじめに

技術の進歩、国際化、社会の多様化に伴い、海外で日本語を学ぶことや使うことの意義もこれまで以上に多様になっている。日本につながる子どもが社会で優勢でないことばを育てるには、家庭だけでなく、学校やコミュニティを始め社会からの支援が必要である（折山, 2019）。一方、個人を取り巻く母語環境は、歴史的社会的にその土地に起因するもの（social context）と家庭環境やその言語を使う個人的なコミュニティ（individual context）があり、個人の成長、月日と共に変化していくものでもある。近年はインターネットの発達により、海外にいても日本の親戚・家族とマルチモーダルでやりとりをしたり、アニメなどの言語・文化資源にアクセスすることも容易になり、子どもの日本語を育てる際に大きな影響を与えている。本稿では、カナダで育った日本ルーツの若者それぞれの日本や日本語へのアクセシビリティ、また彼らの学びが始まった家庭やコミュニティにおける言語を育む環境（以下、言語環境）を、当事者の視点から振り返り、彼らの自律した学びが何に突き動かされ支えられてきたかを探る。

2. 調査の背景

「大人が子どもに提供する母語環境は、子どもの母語維持の鍵」（川上, 2010, p.208）であるが、子どもの成長と共に環境は変わるものである。ことばの学びは一生続くプロセスであるため、それを長期的視点で捉えるとともに、大人と子ども＝当事者が置かれている歴史的社会的背景と共に考察する必要がある（三宅, 2021）。Curdt-Christiansen（2009, 2014, 2018）は、家庭の言語政策（Family Language Policy、以下 FLP）を、言語・文化環境を整える、アクセスを可能にする原動力として捉え、家庭とそれを取り囲む様々な外的要因、内的要因とのダイナミックな関係を解き明かし、言語実践は個人の力では限界があること、同じ土地で生活していても各家庭でアクセスが異なることを示唆している。

2.1 カナダにおける日本語の位置づけ

カナダは、先住民、入植者のイギリス系フランス系、そして多くの民族が共存する多文化国家である。公用語は英仏語であるが、国民の5人に一人が国外生まれで、移民が持ち込む言語の上に公用語を重ねる形で継承語教育が行われている。家庭とコミュニティと学校が連携しマイノリティ言語を支援する背景には、子どもの自己肯定感を養い、家庭でのコミュニケーションの質を高め、子どもに備わっている力を活かして学習を促進させる、自分のルーツの文化価値観を理解する、などの配慮がある（Ontario Ministry of Education, 2008）。

カナダ統計局の調査（Statistics Canada, 2011, 2016）によると、140を超える移民言語のうち日本語は話者数4万8000人弱で全人口のわずか0.1%である。カナダに永住する日本人は7割が女性、そして8割が国際結婚であることが特徴的である。日本につながるいわゆるハーフや

クォーターの数を見ると、0～24歳までの若年層が過半数を占める（Ohki, 2017）。一方、日本外務省のデータによると、カナダの在留邦人数は少なくとも過去20年間右肩上がり推移していることが分かる。調査協力者3名は2000年ごろにカナダで生まれた若者で、生まれた時からインターネットが当たり前存在しているデジタルネイティブ・Z世代と呼ばれる。

2.2 カナダにおける教育機関と日本語のコミュニティ

カナダは州によって教育制度が異なるが、一般的に幼稚園から高校までが義務教育であり、英語かフランス語による教育を受ける。オンタリオ州では、マイノリティ言語を話す子どもは「継承語国際語コース」を課外で受講できるが、日本語は外国語コースになっている実態もある。大学の場合、継承語話者が取れる日本語コースは少ない。

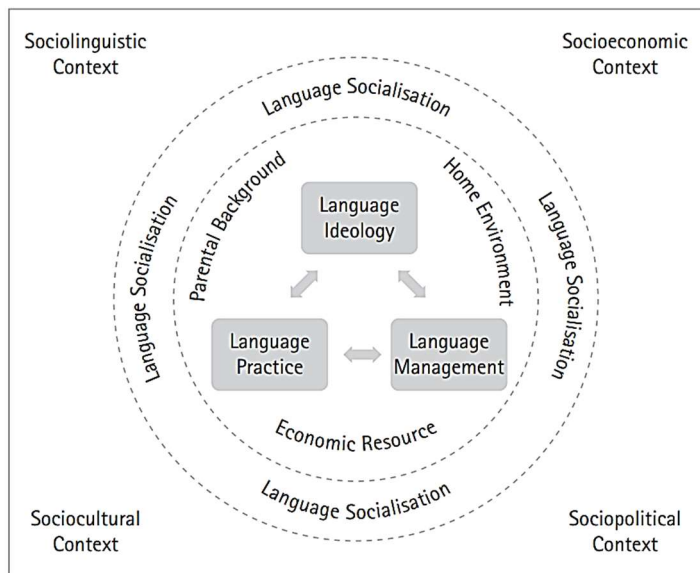
カナダは草の根の日本語教育が盛んで、都市部を中心に、日本語で遊ばせるプレイグループや親子教室、日本語の学校、補習校などがある。カナダの文脈では「日本語コミュニティ」というと、目に見える形のものではなく学校などの目的のために集まるコミュニティになる。

こうしたコミュニティは有志による活動が中心となるため、入れ替わりや消滅があり、また、広い国土や冬の厳しい気象条件のため、通うには困難を伴う。よって家族の支援が必須で、個人の力が及ばない要素も大きく影響してくる。

2.3 子どもを取り巻く言語環境

家庭の言語実践は、子どもが小さければ小さいほど判断が親に任され、FLPの影響を受ける。FLP形成に影響を与える要因についてはCurdt-Christiansenの一連の研究で詳しく考察されている。本研究の目的はFLP要因そのものではないが、特に2018年のモデルは、子どもを取り巻く言語環境を具現化する手がかりになると考えた。

図1. The interdisciplinary framework of FLP
(Curdt-Christiansen, 2018, p.422)



このモデルでは、国の言語政策など社会的要因をマクロレベルとし、その中に家庭環境、経済的資源、親のバックグラウンドに影響を受けてFLPのミクロレベルがあるとし、Language Socializationを間に影響し合うダイナミックな関係を同心円状で捉えている。子どもが成長するにつれ、日本語で何をするかという言語実践は親の決定に基づくものではなく、家庭における言語環境や経済的資源は親が中心となって提供するものであり、子どもは自分が体験したこととして記憶する。親が何を提供するか判断は、家族の置かれた環境における日本語の位置づけといった社会的要因が影響し、子ども自身、また親自身も環境に埋め込まれた目に見えない力、個人の決定権が及ばない力の中で言語実践を行っていると考えられる。

3. 研究課題

以上のことから、このような研究課題を設定した。

1. カナダ育ちで日本にルーツがあり、大学の日本語の会話クラブに自らの意思で参加した若者たちが育った言語環境はどのようなものであったか
 - 1) どのような日本語のコミュニティを持っていたか
 - 2) どのような言語資源や文化資源へのアクセスがあり、日本語でどのような経験をしてきたか
2. 何が彼らの自律学習を促す原動力となったのか

4. 調査概要と分析方法

本研究では、Curdt-Christiansen (2014, 2018) のモデルにある FLP 影響要因を枠組みに、まず調査協力者のバックグラウンド・全体像を知るために Google Form でアンケート調査をし、次にそれをもとに回答のフォローアップを含めた半構造化インタビューを Zoom で実施した。インタビューは調査協力者の選択で、ほぼ日本語だけで行った。インタビューは録音し、音声を文字化したものをデータとして NVivo 12 を使って質的分析を行った。Curdt-Christiansen のモデルから導きだされた要因を概念カテゴリーとして設定、一時的にコードとし、分析を進めるに従ってデータから浮かび上がったコードを新たに立ち上げる、或いは必要に応じて有効なコードに書き換える作業を行った。尚、筆者の一人が分析し、その結果をもう一人が検証するという手順で進めた。

5. 調査協力者

調査協力者は Steve、Shiro、Erin の3名（全員仮名、20-24歳）で、全員カナダ育ちで日本にルーツがあり、大学の日本語の会話クラブに自らの意思で参加した経験がある。Erin だけが日系3世以降の世代で、Steve と Shiro は母親が日本人だった。表1に同居家族や日本語の学習に関するプロフィールを示した。

表 1. 調査協力者の背景

	Steve	Shiro	Erin
同居家族	父 カナダ人 母 日本人 妹	父 カナダ人 母 日本人 弟	母方の祖父 日系 1.5 世 祖母 カナダ人 母 妹
大学での日本語履修	無	無	有 2年間
自己申告による現在の日本語能力(CEFR)			
理解・聞く	B2	B1	B2
理解・読む	A2	B1	B2
話す・やりとり	B2	B1	B2
話す・表現	B2	A2	B1
書く	B1	A1	B1
日本留学の経験	有	無	有

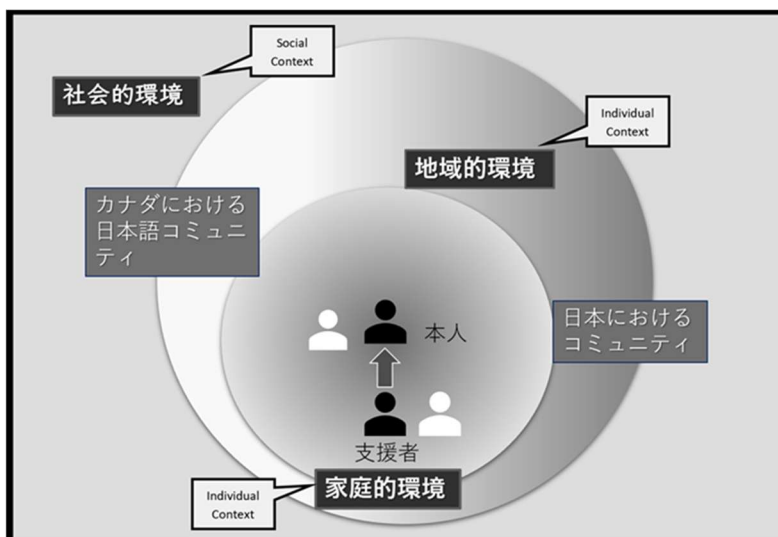
6. 調査結果

6.1 調査協力者の言語環境

調査協力者本人を中心とした言語を育むための環境、つまり言語環境には、まず家庭的環境があり、そしてそれを取り囲む地域的環境があるとわかった。家庭的環境には、本人を中心にコアになる支援者が存在し、生まれた時から今までずっと様々な支援をしていた。同居家族も支援に理解を示し、実際に協力していた様子が伺えた。また、地域的環境には、「カナダにおける日本語のコミュニティ」と「日本におけるコミュニティ」があった。尚、家庭的環境、地域的環境は個人に付随するもので、コミュニティの大きさには個人差が見られた。

更に外側にそれを取り巻く社会的環境があった。その土地特有、今回の場合はカナダ・オンタリオ州のそれぞれの住環境コミュニティの影響を受けたものということになる。図2は、本研究で導き出された概念モデルである。

図2. カナダで日本ルーツの子どもが母語を育てる言語環境モデル



6.1.1 家庭的環境

それぞれの家庭における文化・言語実践のさまや家庭での実践に影響を与えたものが浮き彫りになり、大きく分けると1) 文化実践、2) 日々の言語実践、3) 住環境の変化になった。

(表2参照) 家族ごとに異なった実践があり、調査協力者はそれぞれ違う経験をしていた。なお、以下、表中の空欄はインタビューで特に言及がなかったことを示す。

表2. 家庭的環境

	Steve	Shiro	Erin
文化実践			
文化的行事の参加		-餅つき -太鼓イベント	-地元のおまつり -多文化の食フェスティバル
家族と文化体験			-日本食を作る
文化財の有無		-日本食 -こいのぼり	-日本食

言語実践 1 会話			
家庭内言語	家族間 英 母親 日→英→日 父親 英 妹 英/日	家族間 英 母親 日/英→日 父親 英 弟 英	家族間 英
日本語使用	-母親と -祖父母と -妹とは日英が半分ずつ	-母親と二人だけの時 -祖父母と -弟とはふざけている時	-大叔母の友達と祖父のいとこと
家庭内日本語使用に関するルール	-「普通にナチュラルに出てくる言葉を使って会話」	-自然に任せていた -たまに母親に日本語をもっと話した方がいいと言われた	
言語実践 2 (絵)本、読み聞かせ			
日本語の本の所有	-絵本が 20 冊ぐらい	-絵本が 20 冊ぐらい -母親の本がたくさん有	-祖父の本(日本文化や日本料理の本)
日本語の本を図書館で借りる		-母親が借りてきた	-母親と一緒にいった。日本語と英語のマンガと本を自分で借りて読んだ
読み聞かせ	-母親が日本語の本を読み聞かせ -毎晩両親が一、二冊本を読んでもくれた	-母親が日本語の本を弟と自分に読み聞かせ -母親自身、本を読む習慣があった	-母親が(英語で)
言語実践 3 メディア			
アニメ、テレビ番組、映画の所有	有	有	有
家族と一緒に/ 個人で鑑賞	-アンパンマン、ドラえもん、名探偵コナンなど -ジブリ映画を妹や母親と鑑賞	-ジブリ映画やポケモン、君の名は、聲の形 -家族で国際映画祭に行き、日本映画を鑑賞(例:おくりびと)	-ジブリ映画を妹や母親と鑑賞
言語実践 4 ICT (Information and Communication Technology)			
家族や親戚とのやり取り	-日本の親戚と Skype で話す	-日本の親戚と Skype や LINE でやり取り	
言語実践 5 日本語での教育実践			
日本の通信教育の利用		-教材を取り寄せて母親と勉強	
住環境の移動			
	-加→米→加(別の街)	無	-両親の離婚で州内の都市部の街を転々とした

文化実践として、日本食を作る、食べるという経験が挙げられた。日本食材を扱っている店が近くにあったから可能だったと言える。日系の祖父を持つErinは昼ご飯におにぎりを持って行ったそうで、家庭内言語に関わらず文化実践が見られた。

Erin: はい、あのう。いなり寿司の材料を作った。おじいちゃんは。あのう、いなり。ええと、いなりはだしと味噌を入れて、味、味に…子どもの時は、私の学校の昼ご飯はおじいちゃんがおにぎりを作って。私の昼ご飯はおにぎり、おにぎりだった。

言語実践1は家庭内の日本語使用で、自己申告のため使用の実態は定かではないが、ここでは彼らがどう認識していたかに重きを置いた。SteveとShiroは、中高生の頃は母親とでも英語を使うことがあったようだが、現在は二人とも日本語で話していた。また、家庭内の日本語使用のルールは特に決まっていなかった。

言語実践2の本の読み聞かせに関しては、それぞれ日本語の本が身近にあり、図書館に行くことや読み聞かせについては母親主導で行われていた。

言語実践3のメディアは、3人とも幼少期から日本のアニメ、映画などを家族と楽しんでいて、今では良き思い出になっているようだった。子どものころは、祖父がテレビ番組をDVDに録画して定期的に送ってくれるなど、テクノロジーの発達で日本語の番組にアクセスすることが容易になり、それ以前の世代に不可能であったことが可能になった。

言語実践4のICTは、Z世代が子どものころから日本在住の親戚とリアルタイムで連絡を取っていることがわかった。これについても前の世代からは想像もできないほど「日本のコミュニティ」を身近に感じることができるようになり、より一層豊かにしたと考えられる。

一方、言語実践5の通信教育の利用は、母親主導で行われていた。

なお、住環境の変化は、言語・文化実践とは別だが、家庭環境に大きな影響を与えたものと考えられる。Steveは家族の引っ越し、Erinは両親の離婚という理由で、「日本語のコミュニティ」や言語・文化資源へのアクセスが難しくなったという。新しい環境で子どもたち自身でアクセスを試みるのは現実的には難しく、支援者が重要な役割を果たしていると言える。

6.1.2.1 地域的環境：カナダにおける日本語のコミュニティ

地域的環境のうち、「カナダにおける日本語のコミュニティ」については、1) 教育目的のコミュニティ、2) 日本関連の施設や場、3) サポーターの存在が浮き彫りとなった。

表3. 地域的環境:カナダにおける日本語のコミュニティ

	Steve	Shiro	Erin
教育目的のコミュニティ			
日本語プレイグループ	参加しなかった	参加	参加しなかった
日本語学校	-3歳すぎから7歳ぐらいまで通った	-4年生まで通った	-通わなかった (学校があるかどうかわからなかった)
日本関連の課外活動	無	-高校卒業まで太鼓クラブに通った	無
日本関連の施設や場			
日本食材店	-行ったことがある		-行ったことがある
日本語の本がある図書館	-行かなかった	-行った -主に母が借りた	-行った -日本の漫画(英語版)を借りるに限る
地域でのイベント	-あっても参加しなかった	-太鼓グループの一員として地元のフェスティバルに参加(含、餅つき) -国際映画祭に行った(含、日本映画)	-地元の国際フードフェスティバルに参加

在外公館や日系文化センター		-在外公館内と日系の文化センターに図書貸し出しの場があったと記憶	
サポーター			
日本のバックグラウンドを持つ友だち	-日本語学校に通っていた頃にはいた	-日本語学校や太鼓クラブに自分のようなバックグラウンドを持つ友だちがいた	
地域の人たち	-自分のバックグラウンドについてオープンに話せる空気が有	-太鼓クラブのメンバー	-地元のフェスティバルに祖父が日本ブースを出し、参加
日系の親類縁者			-少し日本語を話す親類縁者がカナダ国内に在住、集まり有

日本人の母親を持つSteveとShiroは、幼少期から教育目的のコミュニティに所属していた。また、日本関連の施設にアクセスしやすい環境で育ち、親主導でプレイグループから始まる一連の学びの場、或いは学校や課外活動に参加した経験があったが、2人とも最終学年まで日本語の学校に通うことはなかった。

Shiroは太鼓クラブに参加し学校以外のコミュニティを得た。最初英語で話していたようだが、年齢が上がるとともに日本人が加わることで日本語の場が増えていったと話した。

日本関連の施設や場へのアクセスについて、カナダでは子どもが自分一人で行きつけられるようになるのは11-12歳以上、運転免許は16歳以上であり、それまでは施設を利用するには親の支援が必要となる。様々な条件で利用するかどうかは親の判断に委ねられるが、日本食材店は、日本食を作る、食べるという文化実践には欠かせない日本食材をそろえる場であり、彼らも親に同行して足を運びやすい場であるが、子どもたちが日本文化に触れる場との認識もあり、文化資源として重要な役割を果たしていた。

なお、彼らは家族以外に、日本のバックグラウンドを持つ友達や仲間、自分を受け入れてくれる地域の人たち、日系のErinについては同居家族以外の親戚の存在があり、サポーターが身近にいたことがわかった。

6.1.2.2 地域的環境：日本におけるコミュニティ

祖父母や親戚が日本に在住している調査協力者の「日本におけるコミュニティ」は非常に豊かなものだった。彼らを訪問したり、カナダにいても、SkypeやLINEを使ったリアルタイムのコミュニケーションを取ることで常に存在感を得ていた。そうでない場合は遠縁にあたる親戚を訪問し、つながりを求めていた。

表 4. 地域的環境：日本におけるコミュニティ

	Steve	Shiro	Erin
日本在住の親戚			
訪問	-家族で訪問 -10回以上	-家族で訪問 弟と二人で訪問したことも有 -10回以上	-祖父のいところを訪問 -共通の趣味について日本語で話す

バーチャルでつながらる	-親戚と Skype で話す	-親戚と Skype や LINE でやり取り	
文化体験			
旅行	-家族で電車でいろいろなどころに行く	-家族で旅行をした(祖母も時々同行)	-祖父のいところを訪問したこと自体が旅
その他	-初詣	-祖父とセミ取り	
日本在住の友達			
付き合い	-母親の友達の家族と長い付き合い有	-手紙をもらったことがあるが返信しなかった	
訪問	-母親の友達の子どもとはいとこのような関係 -毎回訪ねている		
教育目的のコミュニティ			
体験入学	-小4時に1日 いところについて行った	無	無

日本在住の祖父母を持つSteveとShiroは、子どもの頃から家族で10回以上日本を訪問し、家族や親戚と体験したことは楽しい思い出として記憶されていた。日本へ行くことは、家族の経済的な支援があって可能になったと言える。

Steve: 小さい頃の話をする、家族といことえつと電車に乗ってどっか買い物に行くみたい。そういうのが一番楽しい思い出でした。あと焼肉屋さんとかに行き家族とワイワイやるみたい。

Shiro: いい思い出。いっぱいあると思うので。うん。いつもなんかおばあちゃんとおじいちゃんと一緒にだったから、まあすごく楽しかったと思って、まあいろんな、なんかまあ冒険じゃない、まあ冒険か。子どもの時にはなんかいろんな、なんか外に出かけるとか。…なんかセミを取るとか。おじいちゃんと一緒になんかセミを取りに行き、とか、それ、そういうなんか思い出いっぱいあるので。

Steveは日本の小学校への体験入学や、母親の友達の子どもたちとの交流など、実際のコミュニケーションを通しての経験があった。

また、先述の「言語実践4 ICT」に見られるように、Skypeでの通話やLINEでのやり取りにより、カナダにいても日本在住の親戚と頻りに連絡を取り合うことができ、また彼らがカナダにいる自分たちを訪れたりなど、距離を乗り越え、親しい関係を保っていた。

6.1.3 社会的環境

彼らの育った環境では多様性や複言語・複文化を持つことについて肯定的に捉える社会通念があり、間接的な支えになっている、つまり日本語を使うことや日本にルーツがあることを周りが認め、本人も誇りに思い、日本語を保持、アイデンティティを表明しやすい環境にいたことがわかった。例えばShiroは地元のフェスティバルで餅つきに参加した時、日本語を話しながら餅を丸めたそうだが、それは彼にとって「普通」のことだった。Steveも日本語を話すことについて、人が面白がってくれた、日本語を話せてうれしいと述べ、肯定的だった。一方、Erinの祖父は戦後カナダで育ったが、母語である日本語を家庭内でも禁じられ、学べなかった。現在は考えられないほど社会通念が変わったと言える。実際、Erinは、祖父ができなかったことを自分が代わりに成し遂げて家族に日本語を取り戻したいと言っていた。

Steve: …学校に入っても、えっと結構日本語話せる日本人ですっていう、そういう そういうのをえっと面白がってくれた。ほかの人が。…だから あー日本語なんか日本語で言ってよって、よく言われたので。はい。人前でもまあ会話、まあ誰も日本語話せなかったから、なんか「こんにちは」みたいな。そういうことは言ってたんですけど、まあうん人前で話したくなかったっていう経験はなかったです。むしろなんか話せて嬉しいなあっていう感じがずっとありました。今も。子どもの頃からこんなに二つ目のえっと言葉ができるのっていいことだと思ってます。

Erin: あう、reconnect with my culture because my grandpa can't speak the language, so I want to bring it back to my family.

6.2 自律学習を促す原動力

それぞれの成長過程を通して、SteveとShiroの家族においては母親が、Erinの家族では祖父が学びの支援者として、彼らの言語環境を整えるのに重要な役割を果たしていた。

インタビューで、大学の日本語の会話クラブに参加したことや学びを続けていることについて、家族がどう思っているかを聞いたところ、3人とも「うれしい」、「喜んでいた」、「happy」と表現した。これらのことから、支援者らの喜びが自らの喜びにもなり、学び続ける原動力になっていると考えられた。

質問: 日本語の会話クラブに参加し、学び続けていることについて

Steve: (母親について)うん、僕から興味を出しているのがうれしいみたいです。

Shiro: うん、なんか。お母さんもおばあちゃんもなんか、なんか、日本語の会話なんか部活とかある?と聞いたらうんあるよって返事して。…で、なんか、なかなか面白いと思って、うん。…うん、喜んでた。

Erin: …おじいちゃんはとでもうれしい。うれしかった。He got very happy, and he was telling all his friends....He was saying, I heard him talking on the phone and he said, he said he was so happy that I was going over to Japan to learn Japanese because he couldn't learn Japanese. So, he was happy for me that I was doing it.

7. 考察

調査協力者は、それぞれ子ども時代から支援者を中心とした家庭的環境を持ち、支援者である親ら周りの大人たちに導かれた日本語のコミュニティをカナダと日本に持っていた。また、家庭的環境にコアになる支援者が存在している (図2参照)。生まれたときから大人になった今までずっと物理的にも経済的にも精神的にも支援を受け、自律学習にも重要な役割を果たしていると言える。

最初は大人が子どもの学びのために「種まき」をして、子どもはそれを滋養にして育つが、成長に従って自ら主導権を握っていくようになる。支援者の関わりも中心的存在から見守りに変わっていくが、生まれたときから長期的に関わり続けていることは間違いない。

一方、支援者の立場からすると、「種まき」をするためには言語・文化資源へのアクセスの容易さが要になると考えられる。テクノロジーの進化と普及によりそういったアクセスは簡単になり、直に日本語に触れる機会が飛躍的に増え、リアルタイムでのつながりが可能になった。同時に良くも悪くも子ども主導でのアクセスが容易になったが、支援者個人にかかる負担 (Okita, 2002) を幾分軽減したのではないかと思われる。

また、複数言語文化背景を持つことを自然と受け止める社会、それぞれの母語による子育てを実践する、肯定する彼らの社会的環境が追い風となっていたことも伺えた。

なお、インタビューでは「日本語は自分の一部、失いたくない」という発言が2人から聞かれた。彼らの学びの形は様々だったが、自分の意志で学び続けていることを伝えてくれたことばである。

8. 今後の課題

折山 (2019) が示唆するように、子どもたちの母語環境を整えるために何ができるのかについては、社会、コミュニティで共に考え、親ら支援者を当事者目線で支える仕組みを整えていく必要がある。また、Okita (2002) が主張するように、ことばの問題は家庭内の個人的なことと終わらせるのではなく、親ら支援者の取り組みをVisible、表に取り上げていくことが重要だと考えている。

今回の調査協力者はこれまでの研究などで「成功例」として取り上げられてきたタイプではないが、日本語を楽しみ自ら学び続けているという点で、彼らも「成功」していると言えるのではないだろうか。今後、更に多様な学習経験を持つ若者や、その親の視点からも調査を試み、彼らの学びを複眼で捉えていきたい。

謝辞: 本研究はContract Faculty Research Grants Fund of York Universityの助成を受けました。

引用文献

- 折山香弥 (2019) 「日本語を優勢言語としない子どものバイリテラシー習得・発達」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編『親と子をつなぐ継承語教育 日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版
- 川上郁雄 (編) (2010) 『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのためのライフストーリー—』くろしお出版
- 外務省 (2022) 『海外在留邦人数調査統計 令和4年版』<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100293778.xlsx> (2022年7月12日)
- 三宅和子 (2021) 「子育てを応援する—大人になった子どもたちのことばは?—」国際交流基金シドニー日本文化センター/ニューサウスウェールズ大学共催セミナー「オーストラリアで日本語を使う子どもを育てる」発表資料
- Curdt-Christiansen, X. L. (2009). Visible and invisible language planning: Ideological factors in the family language policy of Chinese immigrant families in Quebec. *Language Policy* 8(4), 351–375.
- Curdt-Christiansen, X. L. (2014). Family language policy: Is learning Chinese at odds with learning English in Singapore?. In X. L. Curdt-Christiansen & A. Hancock (Eds.), *Learning Chinese in diasporic communities: Many pathways to being Chinese* (pp. 35–58). Amsterdam: John Benjamins.
- Curdt-Christiansen, X. L. (2018). Family language policy. In J. Tollefson & M. Perez-Milans (Eds.), *The Oxford handbook of language policy and planning* (pp. 420–441). Oxford: Oxford University Press.
- Ohki, T. (2017). Demographic Characteristics of Japanese Canadians in 2016 From 2016 Census of Population. <http://naja.ca/wp/wp-content/uploads/2018/05/2016-Census-Japanese-Canadians-Eng-Final.pdf> (2022年7月12日)
- Okita, T. (2002). *Invisible Work: Bilingualism, Language Choice, and Childrearing in Intermarried Families*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Statistics Canada. (2011). Mixed Unions. https://www12.statcan.gc.ca/nhs-enm/2011/as-sa/99-010-x/99-010-x2011003_3-eng.cfm (2022年7月12日)
- Statistics Canada. (2016). Data tables, 2016 Census. <https://www12.statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/dt-td/index-eng.cfm> (2022年7月12日)